

命懸け

2020. 8. 20

スペインのバルセロナにサグラダ・ファミリア教会という有名な大聖堂がある。不世出の建築家アントニオ・ガウディが設計したものである。

着工から130年以上の歳月を経た今も未完のまま工事が続く壮大な聖堂の建設に、日本人として参加している方がいる。彫刻家の外尾悦郎さんである。建築家、彫刻家など約200名が働くサグラダ・ファミリアの中で、最も長期間にわたり働き続け、ガウディの意志を最も深く受け継いでいるといわれる。

本国、スペインの名だたる彫刻家たちを抑え、外尾さんが重要な仕事を任されてきた理由はどこにあるのだろうか。以下に外尾さんのお話を紹介する。

私は長らくサグラダ・ファミリアの職員ではなく、一回一回、契約で仕事をする請負の彫刻家でした。教会を納得させる作品ができなければ契約を切られる可能性がある。命懸けという言葉は悲壮感があってあまり好きではありませんが、でも私自身としては常に命懸け。というのも命懸けでなければ面白い仕事はできないからです。

ただ本来は生きているということ自体、命懸けだと思うんです。戦争の真っ只中で明日の命も知れない人が、今自分は生きていると感じる。病で余命を宣告された人が、今日この瞬間に最も生きていると感じる。

つまり、死に近い人ほど生きていることを強く感じるわけで、要は死んでもこの仕事をやり遂げる覚悟があるかどうかだと思うんです。

この40年間、思い返せばいろいろなことがありましたが、私がいつも自分自身に言い聞かせてきた言葉がありましてね。「いまがその時、その時がいま」というんですが、本当にやりたいと思っていることがいつか来るだろう。その瞬間に大事な時が来るだろうと思っていても、今真剣に目の前のことをやらない人には決して訪れない。

憧れているその瞬間こそ、実は今であり、だからこそ常に真剣に、命懸けで生きなければいけないと思うんです。

このような話を聞くと、特別な人のケースであり、今の自分の状況とは違うと感じる方もいるかもしれない。だが、全く同じとはいかないまでも、核心を突くエッセンスのようなものは、だれにでもどこにでも通用するものである。少なくとも、今の自分を振り返る材料、刺激にはなり得る。

スペインのバルセロナは、ガウディの街である。至る所にガウディの作品が残っており、街と同化して今でも機能している。よく天才ガウディといわれるが、作品（建造物）を見ていると、だれも真似できない感性であることは何となく理解できる。

一体、いつまで工事を続けるのかと思われているサグラダ・ファミリアだが、ガウディ没後100年にあたる2026年に完成予定となっている。着工から138年である。気の遠くなるような話だが、ヨーロッパでは珍しいことではない。きっと2026年には完成しない。これも珍しいことではない。サグラダ・ファミリア主任彫刻家である外尾さんの活躍は、まだまだ続くはずである。